

「無肥料・無農薬・冬季湛水・不耕起栽培  
むかしの田んぼ・カグヤ米





### 藤崎農場さんとの出会い

カグヤで「発酵」について深め、学び始めた2012年。千葉県神崎市で自然酒を作る寺田本家さんの酒蔵を尋ねました。その際に、寺田本家24代目当主、寺田優さんから「寺田本家のお酒は、藤崎さんのお米を使っているんですよ」と紹介頂きました。

それから毎年、田植えや草刈り、稻刈りとお手伝いに伺っていました。2018年からは、藤崎農場さんの田んぼの一部をお借りし、「むかしの田んぼ」と名付け、カグヤ米を藤崎農場さんのご協力の元、育てはじめました。



**「生き物いっぱい耕さない田んぼ」 藤崎農場**

藤崎農場は千葉県の香取市にあります。利根川が流れ、対岸は茨城県稲敷市、田んぼの一部は神崎町にまたがっています。

藤崎農場では、不耕起栽培でお米を育てています。「不耕起栽培」とは、日本不耕起栽培普及会の岩澤信夫氏が提唱した自然農法で、田んぼを耕さないから「不耕起栽培」と言います。

耕さない主な理由は、土の反転をしないことと、土中に酵素を送らず、雑草の発芽を抑えることです。また、田んぼに一年中水を張った「沼」状態にすることも、「不耕起栽培」の特徴です。

## 稻の色が違つ！

上の写真を見て頂くとお分かりなるかと思ひます

が、畦道を挟んで左右の田んぼで稻の色が違います。

右側の私たちの田んぼは一面「黄緑」といった感じですが、隣の田んぼを見ると濃い緑色をしています。

この色の違いは肥料にあるついで、昔の田んぼは、肥料をあげていないため稻の色にも違いが出るのですが。育つ環境によって、これだけの違いが出るのです。育つ環境によって、これだけの違いが出るのです。

に驚きを感じます。

そして今回は、田んぼに生える草取り（主に、こなぎ）を行いました。



写真左：お隣さんの田んぼ  
右：むかしの田んぼ（カグヤ田）



一般的な田んぼでは除草剤が使われるため、直接田んぼに入つて草を取ることはあまりないようです。昔の田んぼでは、除草剤を使つていないため、草が伸びる前にみんなで草取りを行つていきました。稻と稻の間、○印の辺りの水中には、こなぎという草が生えており、これを取つていきます。

腰を曲げての作業になるため、足腰に負担のかかる重労働ですが、秋の収穫に向けて怠れない大事な作業でもあります。



田植えから約一ヶ月、稻の生長し大きくなっていることを感じたり、トンボやタニシ、カエルなどを発見し、「草取り頑張れ！」と声援を送つてくれているようを感じながら、みんなで草を取つていきました。

# 美味しい、だし茶漬けを食べよう！！！



美味しいだし茶漬けを食べるに当たり  
鰹節から削ろう！ということで、眞田家  
にある鰹節削り器のメンテナンスをし  
てくれました。



眞田家で代々使われている  
鰹節削り刃を研ぐため、  
刃を外します。



カンナから中々刃が外れず、宮大工の方  
の動画を観ながら刃を外したそうです。  
砥石を使って刃を研いで頂きました。



刃を研ぎ、元に戻して完成！  
眞田さん、ありがとうございます！



鰹節を削っているのはオリバー君。  
鰹節を削るのは初めての体験です。



削った鰹節をだしこし袋に  
入れていきます。



エコストーブを使い  
沸騰させます。



今回のだし茶漬けでは、一番だしのみを使います！



竈でご飯を炊いていきます。  
ご飯は昨年採れたカグヤ米！



蓋を開けると湯気が立ち上  
ります！



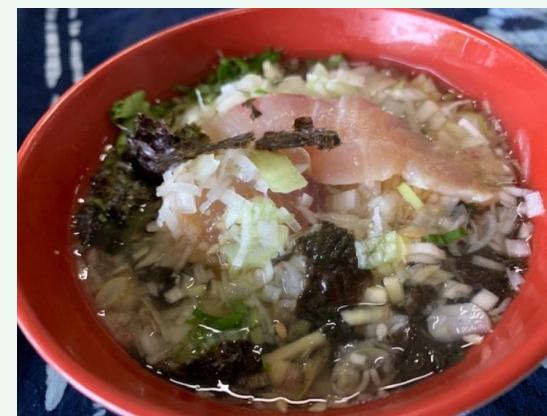
まずはご飯のみで味わいます。



2杯目はだしを掛けて！



3杯目は鯛と薬味を乗せて頂きました！



4杯目は思い思いに好きな食べ方で！



作業後のご飯は最高！  
みんな夢中で頂きました！

## 一般的なお米作りの流れ

## 藤崎農場でのお米作りの流れ

1月

### ●種糞の塩水選

2月下旬～3月

### ●種まき、苗づくり

4月

### ●苗づくり

●種まきの後 25 日経ったら、育苗ハウスを全開し、  
自然の状態で 5.5 葉の成苗（大人の苗）に育てます。

5月

### ●田起こし

### ●田植え

6月

### ●田植え

今回の作業はここです！

### ●草取り・水の管理

7～8月

### ●草取り・水の管理

### ●草取り・水の管理

9月～10月

●稻刈り、乾燥・脱穀、  
糀摺り(もみすり)

●稻刈り、乾燥・脱穀、  
糀摺り(もみすり)

稻刈り後

### ●代掻き

### ●冬季湛水（通年湛水）

田んぼに糠を撒いて水をはります。

正月早々、種もみの塩水選を行い 2 月下旬には種まきです。

藤崎農場は 1 ヶ月も早く種を播きます。

田んぼにはオタマジャクシがいっぱい、田植えが始まります  
(半不耕起では田植え前に田んぼの表面だけ軽くかき混ぜます)。

一般の農法では稚苗（2.5 葉の子どもの苗）を使います。

育苗期間は慣行農法では 25 日前後のところ、

不耕起栽培では倍の約 60 日と長くなります、

丈夫な大人の苗を植える事により、

害虫や病気に強い稻になります。

苗の育つ環境が肝心！

稻はすくすく育ちます。雑草も頑張って伸びます。除草剤は使わないで、昔のように人力で除草します。田んぼの中はカエル、メダカ、タニシ、ザリガニ、クモ、水生昆虫がいっぱいです。空にはトンボ、ツバメ、サギが飛んでいます。

田んぼの草取りは、  
足腰に負担の掛かる重労働！

7月末から 8月初めにかけて、一斉に穂を出し花が咲き受粉し、  
登熟期に入ります。

刈り取りの終わった田んぼに米ぬかを撒き、水を張ります。  
米ぬかは生きものの食べ物になります。田んぼは冬期湛水、  
氷の張った水中にも生きものの活動がみられます。  
冬の静かな田んぼは、鴨がよく遊びに来ます。時々白鳥も飛来  
します。2 月から 3 月にかけてニホンアカガエルが産卵のため、  
水を求めて田んぼに集まります。

冬も生き物がいっぱい！

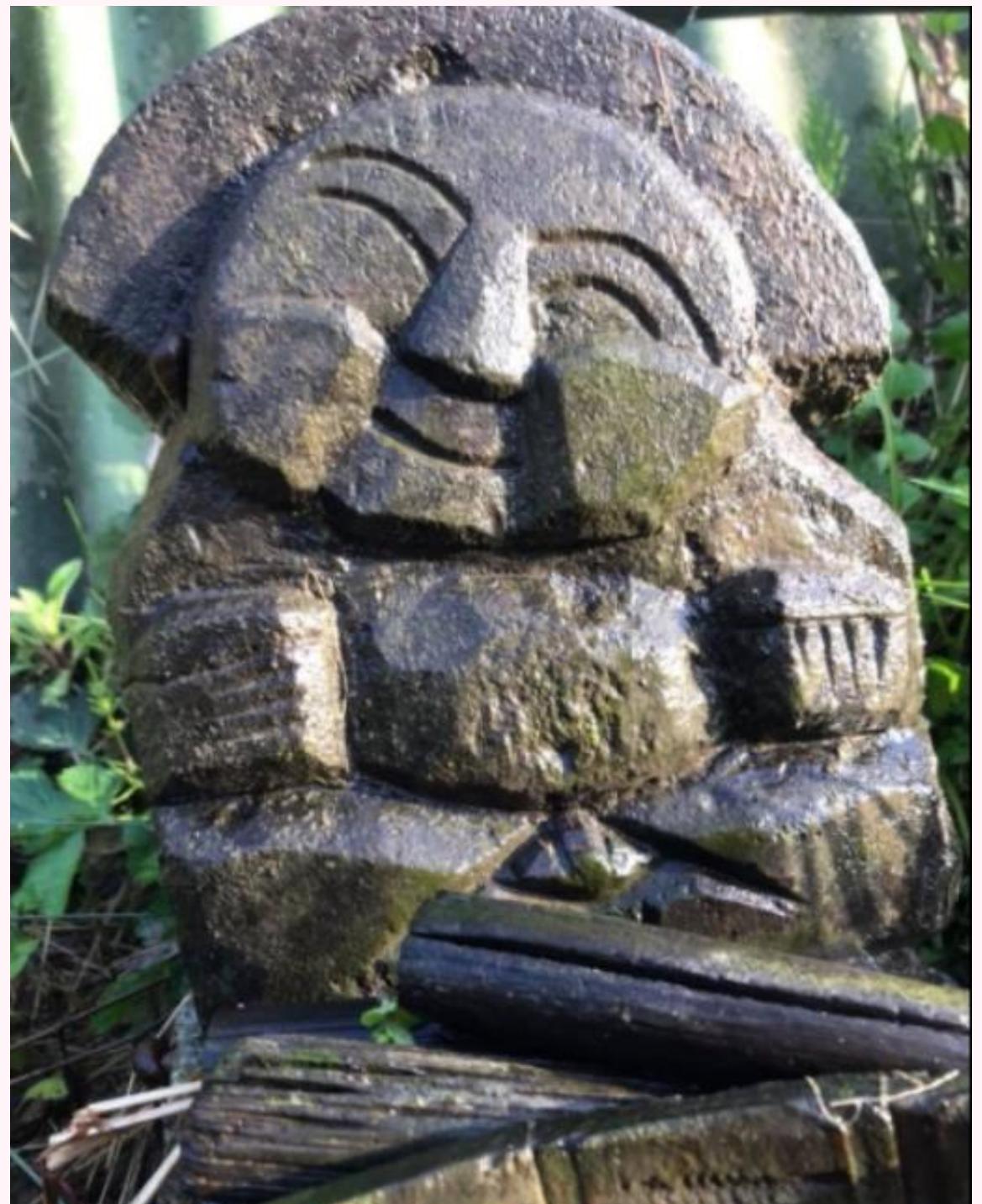
# 「むかしの田んぼ」とは



「むかしの田んぼ」は、古来から大切にしてきた日本人の精神を尊びお米づくりを行っています。それは八百万の神々にあるようにいのちを大切にするため、農薬は一切使わず、田んぼの生態系の働きを活かすようにしています。

冬の間は、水を張ることによって渡り鳥を中心とした冬鳥たちが飛来してきて、田んぼで冬を越していきます。その御蔭で雑草の種も攪拌（かくはん）され草取りの作業もあまり必要になりません。

大量の田螺（たにし）が毎年生まれては、お米を守り雑草たちの新芽を食べてくれます。まさに、自然の働きを上手に活かして自然の恩恵によって育てるお米。それを私たちは「むかしの田んぼ」と名付けた理由です。



田の神：稻作の豊凶を見守る農耕神（写真：カグヤ福岡農園の田の神様）

春の稻作開始時期になると家や里へ下って、田の神となり、秋には山へ帰る。田仕事に携わる農民の作業を見守る、田の神信仰は日本全国各地で伝承され、これを、田の神・山の神の「春秋去來」と言うそうです。

田の神像には地蔵像、仏像、神像、農民型など様々あり、最も多いのは農民型の田の神像で、頭にわらの編み物を被り、右手にしゃもじを持って踊る姿の田の神様像だそうです。

# 「むかしの田んぼ」では、日本古来から 続いている伝統の年中行事を大切にしています。

## ●田の神祭り

祈年祭：五穀が無事に成熟を祈るお祀り

別名：春祭（としごいのまつり）：※とし=稻



## 御田植祭：農耕儀礼の最も重要な儀礼

早乙女：田植えの日に苗を植える女性のこと。ハレの役であり、神に奉仕する神役でもある。



## 新嘗祭：豊作を感謝するお祀り

地域によっては、新嘗祭までは新米を食べない地域も未だに存在しているそうです。



通常の農家さんでは、子どもの苗（稚苗）を植えるそうですが、藤崎農場さんではそれよりも大きく育てた苗（成苗）を植えます。大人の苗になるまでにはあえて冬の厳しい気候のもとで育てることで、病気や自然災害に強くたくましい稻が育つのだそうです。そんな藤崎さんと郷さんの深い見守りによって育っているのは稻だけではなく、オタマジャクシやミミズ、タニシなどの生き物も共生しており、まさに「見守る田んぼ」です。

また。無農薬・無肥料で育てているため通常の稻よりも小ぶりですが、いのちの力はとても充実して、美味しいむかしの御米ができます。日本の農業は厳しい自然にあっても豊かなものであったはずです。それはかつての「日本の原風景」の中に遺っているように、みんなが笑い稻と一緒に育っていく中で豊かな時間を過ごしたから今日まで続いてきたのです。

農薬を一切使わず、タニシやカエル、ドジョウに水鳥、そんな生き物たちの力を借りつつ、稻自身の力で育った自然米。この一粒一粒が未来への懸け橋となることを信じています。

**私たちが田んぼに携わるのは、お米を育てたいのではなく日本人の  
生き方や智慧を子どもたちに伝承しようと取り組んでいるからです。**

## ●田んぼに関連する取り組み

### 菖蒲湯（しょうぶゆ）



「菖蒲湯」の由来は、田の神を迎えるための「禊」の名残りとも言われているようです。かつては「田植え」の中心となる女性が家にこもり、身を清める「五月忌み（さつきみ）」という風習があり、この日には、家の軒に菖蒲をさし、早乙女（さおとめ）と呼ばれる女性たちが菖蒲で作られた鉢巻を巻いて、菖蒲湯に入り、身を清めたといいます。

菖蒲湯の効用は、病気にならない、勝負事に勝つ、蛇にかまれないなどと言われており、昔から、厄除け、魔除けなどの不思議な力があると信じられていたそうです。

実際に、菖蒲湯が体に良いというのは科学的な根拠もあり、菖蒲湯は体を温め、腰痛など体の痛みにも効くとされていますが、こんな由来があったとは、驚きです！

日本の行事を深めていくと、そもそも「稻作文化」なしでは語れないことに気づかされ、私たち日本人のルーツとなっている「米」を、もっともっと大事に守っていきたいと、改めて感じました。

[カグヤHP 2014/05/06 自然から学ぶブログより](#)

### 水口祭りの室礼



「水口祭り」の室礼：瑞々しい稻穂を育てる田の神を祭る行事。

「苗がよく根付き、今年も豊作でありますように」と、早乙女たちが水をはった田に入って苗を植え、田の神に祈る習わし（予祝）があったようです。

水口祭りの水口とは、苗代に稻の種をまいた日に苗代田の水口（用水路の入り口）や畦で祭りが行われていたことによるものだそうです。

つくね芋：「稻の根がしっかりと根付きますように」との言葉の盛り物です。

お酒：田の神に供える大事な一品として、麻を結んでいます。

手ぬぐい：田植えをする「早乙女（さおとめ）」に見立てています。

カタクチイワシを干した田作り：昔、田畠の肥料としていたためこのように呼ばれ、

別名「ごまめ」とも言います。肥料にしたところ、お米が五万俵も取れたので「五万米（ごまめ）」と書くようになりましたそうで、五穀豊穣を願う縁起物です。

[カグヤHP 2017/06/06 自然から学ぶブログより](#)